

T. J. F. Tillemans 著 *Persons of Authority*

木村 誠 司

仏陀は無批判に崇められるだけの存在だろうか。それとも、その宗教的価値は、理性によって確立され得るのだろうか。この問題は、ここ十年ほど、仏教論理学という分野において、主要な研究対象であった。本書『権威の人』*Persons of Authority* もまた、そのような研究に関わるものであることは、著者自身が明らかにしている。著者ティルマンス Tom J. F. Tillemans 氏は、次のように述べている。「本書は、宗教的師〔＝仏陀〕の権威を確立するという問題に対する仏教徒のアプローチに関するものである」(緒言四頁)。「」内は筆者)。このような明確な目的を持って、著者は一人のチベット人学僧ガクワンテンダル Ngag dbang bstan dar (一七五九—一八四〇)、ゲルク派)の著作『師が権威の人であることを確立する記述』*Ston pa tshead ma'i skeye bur sgrub pa'i gtam* (以下TT) に注目した。本書は、TTの英訳をテキスト・注記と共に提示し、詳しい序論を付した研究書である。その構成は次の如くである。

- (1) 緒言 (Preface)
- (2) 文献目録 (References)
- (3) 略号 (Abbreviations)

- (4) 序論 (Introduction)
- (5) テキストと英訳に関するコメント (Remarks on the text and translation)
- (6) TTの大綱 (Topical outlines (sa bead) in the *Ston pa tshead ma'i skeye bur sgrub pa'i gtam*)
- (7) 英訳とテキスト (Translation and Tibetan text)
- (8) 訳注 (Notes on the translation)
- (9) 索引 (Index)

さて、本書は、TTというこれまで紹介されたことのない作品を公けにした、という点で、まず評価されるべきであろう。さらに、その英訳は正確であり、引用文献のトレースにも遺漏はなく、有益な情報や見解も数多く示されている。その点でも、すぐれた業績である。中でも、「仏陀」と「仏陀の言葉」についての見解(序論一八一—二四頁)は、最も重要である。従来の研究では、「仏陀」と「仏陀の言葉」との間には、どちらがどちらを論証するというような関係はなく、両者は互換的もしくは循環論法的関係にある、とされてき

た。これに対し、著者は、『仏陀の言葉』から「仏陀」の権威が論証されるのであって、その逆はあり得ない』というTTの見解を示し、従来の研究に再考を迫った。しかし、このようなすぐれた見解が示される一方で、重大な見落としもあり、英訳にもいくつか不備な点が見られる。次に、それらについて述べよう。

著者は、聖典の妥当性を保証する条件として、チベット人学僧が挙げる三考察 (dpyod pa gsum) について言及する (序論九—一五頁)。著者は、まず、三考察がチベット人学僧によって術語化されたとみる。次に著者は、三考察が、タルマキールティ *Dharmakīrti* (六〇〇—六六〇) 作『量評釈』 *Pramāṇavārtika* 「為自比量」 *Svārth-anumāna* 章第二二五偈に由来すると述べる。著者が指摘するように、ゲルク派の高僧タルマリンチェン *Darma rin chen* (二二六四—二四三二) は、確かに、第二二五偈に対する注釈で、三考察に言及している (序論二二頁)。しかし、タルマリンチェンは、第二二四偈に対する注釈でも、「三考察によって清浄なる聖典」『量評釈頌の解説』 *Tshad ma nam 'grel gyi tshig le 'ur bya ba'i nam bshad Thar lam phyin ci ma log pan gsal ba* (東北 五四五〇、九九a 四—五) と述べ、三考察に触れている。さらに、ゲルク派の開祖ツォンカパ *Tsong kha pa* (二二七五—二四一九) の講義録『量の大備忘録』 *Tshad ma'i bried byang chen mo* (ツォンカパ全集「タシルンポ版」第二二卷) では、次のように述べられている。

【第二二四偈で】「(㉔)脈絡 (berl, sambandha) があり、(㉕)適切な手段 (rjes mthun thabs, anugunopāya) [を具え]、(㉖)人間の目

的 (skye bu'i don, puruśārtha) を述べる文章 [= 聖典] の考察が主要なものであるが、それ以外「の聖典の考察」は主要なものではないのである」と説明されているので、取るべきもの (blang bya, upādeya) と捨てるべきもの (dor bya, heya) と非苦非樂 (gtang sngoms) と設定されるべき立場を、(㉔)首尾一貫して (brel chags su) 説き、(㉖)人間の望む生天 (mngon mtho, abhyudaya) と解脱 (nges legs, niḥsreyasa) と二つ目的を述べ、(㉕)その目的を獲得することに適切な手段を不顛倒に説く聖典は、三考察によって清浄なるものと確定されるべきなのである。(六a 二—四)

これによれば、三考察は、むしろ、第二二四偈に由来する、とみるべきであろう⁽¹⁾。また、この三考察が、チベット人学僧によって術語化された⁽²⁾、とすることにも問題はある。インドの学僧シャーキャブッディ *Sākyabuddhi* (六六〇—七二〇) は、第二二四偈の注釈中で、「(㉔)(㉕)と(㉖)」三功德 (yon tan gsum) を具えたその論書を考察すべきなのである」『量評釈注』 *Pramāṇavārtikā tka* (デルゲ版 四二二〇—二四二二六) と述べている。表現こそ異なるが、三功德はまぎれもなく術語化であろう⁽³⁾。

次に英訳に関して気付いた点を述べよう。著者は *zhen* を *grasp* と訳す (二六頁 二二—二三行) が、それは、むしろ *snang* に対する訳語である。判断や分別という意味を持つ *zhen* の訳語としては *grasp* は不適當である。また、五〇頁 三二行では、*zhen* は *apprehend* と訳される。これも適切な訳語に統一すべきである。また、*don spyi'i tshul gyis* に対する *conceptually* と二つ訳 (五〇頁 三八行) も不適切である。*don spyi* は四種の *spyi* の一種であり「対象

としての「普遍」というほどの意味である。最後に、最も気になる点を述べよう。著者は *tshad ma'i skye bu* を一貫して *person of authority* と訳すが、*tshad ma* には訳語を与えず、対応するサンスクリット語 *pramana* で代用している。著者は緒言において、「*authority* は理性と対立するものではなく、宗教的強制を意味するものではない」と述べている¹⁾。むしろ *tshad ma, pramana* を *Mittel richtiger Erkenntnis* と訳すのは不十分であり、*means of valid cognition* と訳すべきである²⁾とも述べている。*tshad ma, pramana* の現代語訳は確かにむずかしいが、緒言の見識を実際の訳に生かし、より適切な訳語を与えて欲しかった。

他に気付いたことをもう二点指摘しておきたい。著者は序論(一二三頁)において、チベット仏教における論理学の位置付けという問題(論理学を世俗の学問とみなすか否か)について述べている。その際、著者は、この問題を始めて学会で紹介したシチェルバツキ — Th. Stcherbatsky の *Buddhist Logic* に言及している³⁾。 *Buddhist Logic* は古典的名著でもあり、その業績を無視するのは、研究者としての姿勢を問われることにもなる。今、ひとつは、ごく些細なことである。著者は、緒言の末尾で、シュタインケルナー E. Steinkellner 氏から教示されたとして、*tshad ma skye bu* のインド論理学書における出典個所を付記しているが、その個所は(240a6) *ཇི་ཅི་ཅུ་* (240b6) である。

本書の真の価値は、これからの研究によってより明らかにされるであろう。

注

- (1) 拙稿「初期ゲルク派の聖典観について」駒沢大学仏教学部論集第一八号 昭和六二年 九五頁および注14参照
- (2) 注(1)の拙稿註1)参照
- (3) Th. Stcherbatsky, *Buddhist Logic*. vol. 2. p. 45 *ཇི་ཅི་ཅུ་* *zhen* を *judgement* と訳す。
- (4) 小野田俊蔵「*spyi* (類) と *bye-brag* (種) について」印仏研30—2 昭和五七年 九一—九二頁 (一九九五年七月一日)

[Tom J. F. Tillemans, *Persons of Authority: The sTom pa tshad ma'i skye bur sgrub pa'i gtam of a lag Ngag dbang bstan dar, A Tibetan Work on the Central Religious Questions in Buddhist Epistemology* (Tibetan and Indo-Tibetan Studies 5), Franz Steiner Verlag Stuttgart, 1993. xvi pp. 90 DM. 46]